

旧車を愛するすべての人に

プレミアム旧車マガジン  
KYU-SHA-JIN

# 旧車人

vol.9

定価980円

Way of The Classic Car Style

*The Essence of Selection*

## 旧車選びの極意

フェアレディ240ZG / プリンス・スカイライン1500デラックス / カローラクーペ1600レビン  
アルファ・ロメオGT1300Jr / 130フェアレディZ RB26DETT / トヨタスポーツ800  
スバル360 / セドリック2000GL / カルマン・ギア / スカイラインGT-R / いすゞ117クーペ  
クラウン2000ロイヤルサルーン / コンテッサ1300クーペ / シェベル / スカイラインGT-B

*Kyu-sha-jin Report*

第2回旧車人ミーティング開催報告

*Modernize Tokyo*

モダナイズ旧車の世界

*Kyu-sha-jin Gear*

旧車人GEAR

名車に相応しいオーナーを目指せ!

*Kyu-sha-jin Special Essay*

デートしようよ、ケンメリで

*The Heritage of Japanese Racing Car*

国産レーシングカー遺産

プリンスR380 / スカイラインGT





# 漆黒を身にまとい蘇る野望

夜明けの街。その野太いアイドリリングがなければ、そのまま闇に溶け込んでいきそうな漆黒の1台。かの「ロッキーオート」が自身のコンセプトでイチから仕上げた驚愕のケンメリ。豪放と緻密が同居している。

文●齋藤耕平 写真●内藤敬仁 Text by Kouhei Saito Photos by Takahito Naito  
協力●ロッキーオート TEL0564-58-7080



ボンネットを開け放せば、そこには見慣れたRB26DETTのヘッドが。ただし、本体はRB30でありつつ、あえてNAにこだわった。

## KEN&MARRY SKYLINE RB30+MULTI-LINK

長らく不景気が連呼されるご時世だが、東京中心部の再開発は相変わらずだ。どれもガラス張りのビルのテナントには世界に名だたる高級ブランドが軒を連ねる。そんな早朝の街の様子を、漆黒を身にまとった1台のケンメリがボディへと映し込んでゆく。

闇に溶け込んでしまいそうなメタリックブラック。ただしエキゾーストノットは甲高くNAであることを主張し続けている。精緻に組み付けられたオーバーフェンダーには一切の歪みはなく、その鋭いエッジが、わずかな光を反射してボディのフォルムを強調する。ファッションでも黒は難しい色とされるが、まさにこのクルマは確信犯的にブラックを選択している。

多少クルマに詳しい人ならば、リアビューを確認したくなるはずだ。「きつとRのエンブレム

が付いているはず」と。ただし、いくら目を凝らしてテールランプ周辺を覗き込んでも、車両のグレードを示すような装飾は一切ないのである。果たしてコイツは何者なのか？ 多数派がきつと首を傾げるに違いない。

そう、エンブレムがないことで、この漆黒の1台のスタイルは完成しているのだ。何者にも既定されない自由な存在である、と。あえて“記号性を廃す”ことで、逆に高らかに主張をしているのである。従来の文脈から逃れた孤高の存在であるということ。

あえて似た存在を探してみれば、たとえば新装なったばかりの東京駅が似ているかもしれない。歴史を感じさせるレンガ造りの外観とは裏腹に、その中身はといえば最新のアーキテクチャーで構築されている。耐震構造や空調設備、コ

ンピュータ制御によるライティングシステム等、歴史的建築物としての価値に最大限の力を払ったうえで、現代人のニーズを最先端のテクノロジーで高度に満たすという存在に…。

そう、この漆黒のケンメリは、現代のドラフトレインのみならず、マルチリンクの前駆スベンションまで高度に組み込んでしまったという1台。驚くべきことにインテリアも最新のものとリメイクされているのである。エアコン？ 問われるべくもなく、当然のことに装着済みである。それらすべてが無言のうちに漆黒のボディへと整然とまとめ上げられているのである。唯一強い主張があるとすれば、それはツインテールから弾き出す街を震わすエキゾーストノットだろうか。ツンと澄ましたガラス張りのビル街にはかなり刺激的だ。





エンジンはRB30がベース。そこにRB26DETT用のヘッドを組み合わせている。ターボには見向きもせず、NAならではの伸びとサウンドを追求しているのが特徴だ。エキゾーストノットのみならず、ファンネルからの吸気音も迫力そのもの。ただし、アイドリングの安定性はもちろん、様々な回転域からのアクセルのツキも最高だ。クラッチミートに気を遣わせるなどということは一切ない。

その理由は簡単。高度にチューニングされたインジェクション仕様だからである。キャブの時代からインジェクションの時代へ。もちろん高度な排出ガス規制への対応という社会的ニーズはあるが、もうひとつは、日常的な使い勝手の良さや安定したハイパフォーマンスの両立を目的としたフィーチャーだった。「苦勞」の2文字は時には趣味性の高さに繋がるものだが、1年を通じて寒暖の差が大きく、渋滞も少ない現代の我が国においては、インジェクションの採用は極めて合理的である。

さらにこのクルマ、特に高速などを走らせてみれば明白だが、ボディそのものが極めてシメトリーに再構築されていることが分かる。サブフレームも含めてR33のマルチリンクサスペンションが組み込まれているのは先に述べた通りだが、その滑らかなサスの動きを支えるボディそのものへのこだわりを、高速走行では誰もが実感するに違いない出来なのである。

ただ「付けました」では決してプロの仕事ではないということである。サスペンションの正確な作動性を保証するものこそ、剛性バランスのみならず、高度にアライメント調整されたモノコックシェルによるもの。もちろんホワイトボディにまでバラバラにされた状態として、再構築の土台を徹底的にチューニングしているのである。高速域での強烈な直進性や激しい入力があった際のしなやかなサスの作動性などは、ボディそのものの徹底的な見直しを成さなければ絶対に実現しない。

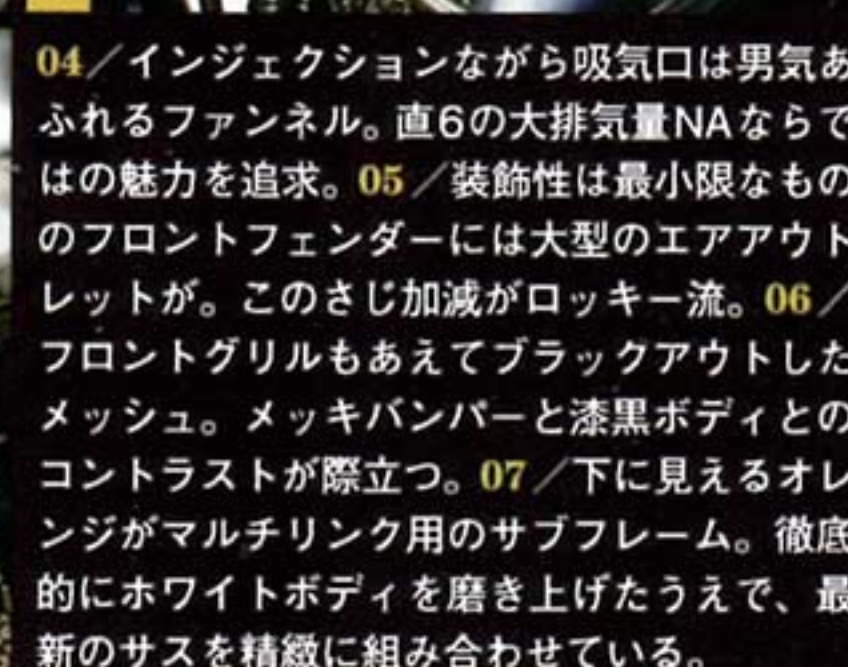
エキゾーストはハッキリ言ってワイルドである。街は震撼する。ただし、走り込む距離が伸びるに従って、それ以外の要素は極めて精密に再構築されていることが分かる。アイデアやコンセプトは大胆以外何者でもないのだけれど、それをいざ現実化しようとした際の取り組みは、極めて精緻ということである。

ただし、エンジンの性格そのものは、ドライバーに対して「もっと開ける、もっと開ける」と迫ってくる情動的な仕上がりとなっている。ターボではなく、あえてNA。この選択肢の真骨頂が、この情感豊かなエンジンにあることがハッキリと分かる。自制心をどうコントロールするか？ は、まさにオトナの嗜みか。





01 / キレイに取まったレザーのレカロ。比較的  
コクピットに余裕のあるケンメリだからこそ実  
現したフィット感。乗り心地にも貢献している。  
02 / 虚飾を廃したシンプルなツインテール。サ  
ウンドのほうはご想像にお任せしたい。NAら  
しさとチューンドカーらしき満点の世界が満喫  
できる。03 / エクステリアはあえて地味を狙っ  
ているが、ドアを開け放ちコクピットに座れば、  
前方にはR33そのもののインパネが広がる。レ  
ース用のデジタルメーターがプラスされたそこ  
は、現代を飛び超えて“未来”そのものだ。



04 / インジェクションながら吸気口は男気あ  
ふれるファンネル。直6の大排気量NAならで  
はの魅力を追求。05 / 装飾性は最小限なも  
のフロントフェンダーには大型のエアアウ  
トレットが。このさじ加減がロッキー流。06 /  
フロントグリルもあえてブラックアウトした  
メッシュ。メッキバンパーと漆黒ボディとの  
コントラストが際立つ。07 / 下に見えるオー  
レンジがマルチリンク用のサブフレーム。徹  
底的にホワイトボディを磨き上げたうえで、最  
新のサスを精緻に組み合わせている。

大胆なアイデアを緻密な取り組みで実現す  
るのは、一朝一夕では実現しない。実現  
化のための技量というのは、莫大な経験値によ  
って育まれるものだからだ。特に見た目では判  
然としないボディ本体への取り組みなどは、実  
際に相応なスピード領域で確認しなくては、そ  
の意義や価値を見出せないもの。実際、目立つ  
部分には限りなく手間をかけてはいても、走ら  
せた途端、いわゆるバランスを失っていること  
が露見してしまうシロモノも少なくない。

唐突で恐縮だが、たとえば今話題のスマート  
フォンだ。大きくふたつの流れがあるが、ひと  
つはモニターサイズにしろ重量にしろ、どんど  
んと巨大化していつている。かたやオリジナル  
とされるメーカーの最新作は、それらライバル  
たちとは真逆のコンセプトで仕上げた。限り  
なく薄く、そして限りなく軽く、である。

ただし、そのアイデアを実現するためには、  
アルミのユニボディを超高精度に削り出すだけ  
でなく、筐体を構成するその他のアルミ部材やガ  
ラス部材を、なんと700以上の部材を並べ、そ

れらをレーザーで測定し、最良の組み合わせを  
ミクロン単位で調整しているという。精度高く  
作っても必ず誤差は出る。それを組み合わせに  
よって調整し、史上最高の組立精度を実現しよ  
うとする取り組みである。

しかもそのためには、一般的な工作機械では  
なく、プロトタイプ製作用の特殊な機械を、あ  
えて大量生産用のラインに投入しているとい  
う。その筋に詳しい人によれば、「ちょっと、狂  
っている」らしい(笑)。

ただし、結果として、ひとりひとりのユー  
ザーの手のなかには、誰もが実感する宝飾品のよ  
うな精度を感じさせるものが実在し、かつそれ  
はわずか112gの質量しか存在しない...という  
世界が現れる。アイデアを実現化するには、そ  
の筋のプロが「クレイジー」のひとりで済ます  
ような取り組みをしているのだが、結果はひと  
りひとりのユーザーの満足感に直結するという  
次第。フィーチャー競争に明け暮れ、結果とし  
てどんどんと肥大化してゆく流れとは、何か  
が決定的に違くと、そろそろ多数派が気づく頃だ

ろうか...。  
ボディワークの緻密さは、現車を目の当  
にすると一目瞭然となる。それは塗装の質で  
誤魔化せない。しかも塗装色がブラックメタ  
リックとなれば、周囲の風景を克明に映し込  
み、わすかの歪みが存在すれば、フォ  
ムは崩れてしまうものだ。ただし、このケン  
リには破綻が一切ない。いや逆に、その濃  
たボディを際立たせるために、あえて漆黒  
に身を包んだといったところだろうか。その  
密な存在感は、かのわずか112gしかないス  
ートフォンの持つ存在感と極めて似ている  
者には感じられた。もちろんその価格を含  
マホほどに身近な存在ではないのは確かだ  
大胆なアイデアと緻密なアプローチが極めて  
似ているのである。

表面的な記号性の競争に明け暮れるので  
なく、また過去の因習に囚われるのことも  
自由な発想で、唯一無二の存在たらんと  
とから、それは始まる。そしてそれが実  
の世に存在するという事を神に感謝すべき





前ページのL型3.1L仕様でも意外だったのだが、こちらはさらにロッキーオートらしくない1台だ。なんと純正レッドをそのまま生かした、低走行フルオリジナル状態のケンメリGT-Rの本物なのだから。RBスワップでもはや押しも押されぬ旧車ショップの頂点に君臨しているロッキーオートが販売するコンプリートカーは、どれも1000万円を超えてしまうほど手が入っている。当然そんなクルマを買う層は限

られているだろうが、それだけ裕福な人であれば「普段はRBで快適に街乗りを楽しみ、本物のGT-Rを車庫に置いて眺めていたい」という要望が少なくないのだとか。求められるままにGT-Rの仕入れを強化していたところ、今回のような宝珠の1台に巡り合えたという。

見るからにコンディションのいいGT-Rだが、これが驚くことに剥離塗装をしたフルレストアではないということ。長くオ

ナーのまま車庫保管されていたクルマで、内外装、エンジンなどは走行距離5万kmを超えたあたりですべてが静止したままなのだ。しかも、この純正レッドは当時のカタログにも載っていない特別色。GTなどには存在したが、GT-Rにあったのはシルバーと白のみ。新車購入時にオーナーが特別にオーダーして塗装してもらったそうで、本物のケンメリRには7台が赤く塗装されたという。

ENTRY  
No.02

# SKYLINE HT2000GT-R

スカイラインHT2000GT-R

## 希少な純正レッドが輝くケンメリR

若い頃に憧れたアイドルや初恋の相手。手が届かなかった存在が今、目の前に当時のままの姿で現れたとしたらアナタならどうするだろうか？ 生産台数が前号で200台以上と判明したケンメリRのなかでも、貴重な存在を新車時のような姿で捕獲した。

文●増田 満 写真●内藤敬仁  
Text by Mitsuru Masuda Photos by Takahito Naito



S20型エンジンは手を加えていない状態。そんなGT-Rも探せばまだまだ残っているのかもしれない？



販売価格を聞くのが恐ろしいようなクルマだが、意に反して売却済みとなってしまったという。お金には換えられない価値があるのは間違いないが、そのためには途方もない予算が必要なことも事実。だが、金額ではないと言い切れる人なら、このような存在は無二。おそらくGT-R取り扱い数では現在日本一だろうロッキーオートなら、またこのような奇跡を起こしてくれるかもしれない。

純正の姿だとオーバーフェンダー内のタイヤとホイールはこれほどまでに細い。ホイール自体も貴重品。



驚くことに単に全塗装したに留まるボディは超絶コンディション。ホイールをはじめフルオリジナル状態だ。



ハコスカの鋭角なプレスラインと比較すると、なめらかな丸みを帯びたスタイルがケンメリの特徴だ。



インテリアにも欠品はなく新車同様のコンディション。メーターパネルには保護ビニールまで残っている。



シートも純正のものが前後とも揃っている。内張には保護用ビニールが！まさに奇跡のような状態。



SHOP INFORMATION

ロッキーオート

愛知県岡崎市明大寺町字大塚55-31  
TEL0564-58-7080  
<http://www.rockyauto.co.jp/>

残念ながらこのケンメリは売却済みとなってしまっているが、現在スカイラインGT-Rの取り扱い数が日本で最も多いロッキーオートだから、同様のコンディション車をきっと見つけてくれるはずだ。



# 絶対見つかる伴侶

## KYU-SHA-SELECTION

旧車選びの極意は単に好きなクルマを選べばいいというものではないこと、お分かりだろうか？ 片思いだけじゃ実らないのが旧車選び。相思相愛になるためには綿密な人生設計と自分らしい生き方の追求があって初めてできるのだ。そのためのお相手とは？ 日本のどこかに貴方を待ってる旧車がいる。

# SKYLINE HT2000GT L28kai3.1

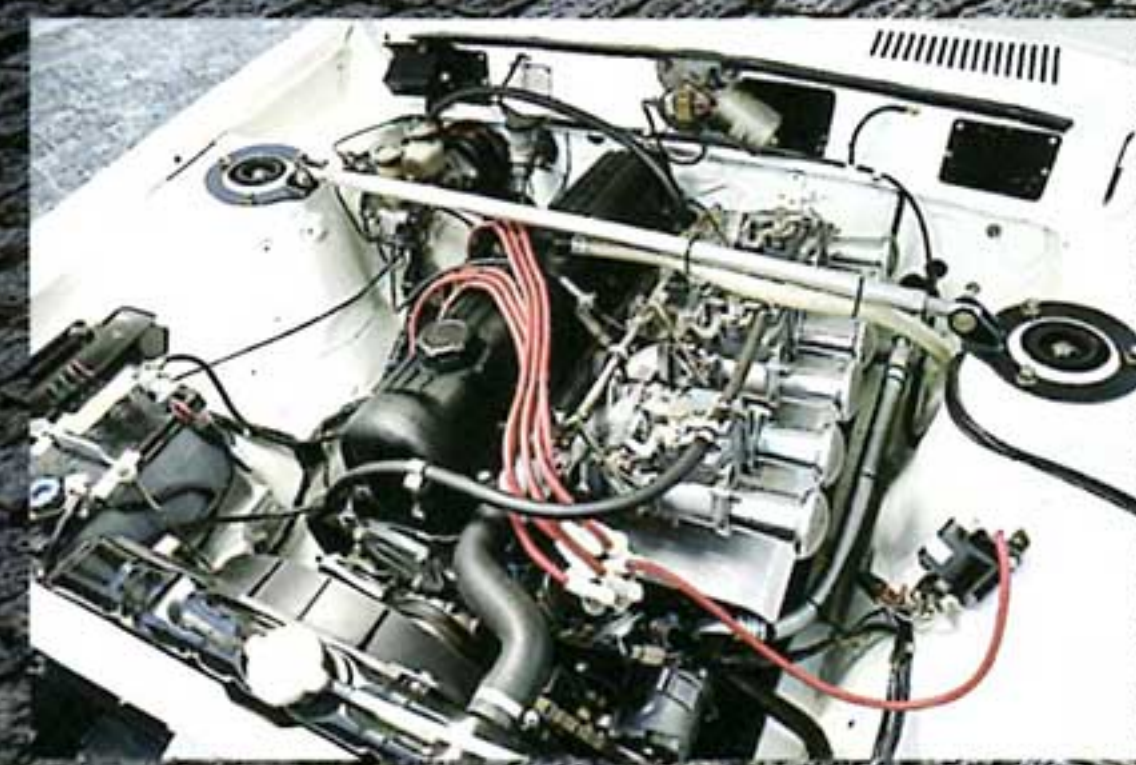
ENTRY  
No. 01

スカイラインHT2000GT L28改3.1

文●増田 満 写真●内藤敬仁  
Text by Mitsuru Masuda Photos by Takahito Naito



前後のオーバーフェンダーやリアフェンダー、エンジンシールド、ボンプレミなどGT-R仕様といえる。ホイールは定番のRSワタナベだ。



このエンジンは、元々L28エンジンをベースに、L28エンジンの性能を引き上げる追加チューニングが施されている。



GT-R仕様のしくアルミのメーターパネルやソフトパターンが美しいソフトノブに変更、ダットサンコンペのステアリングとシートも見える。



リアボディラインは、GT-RのL28エンジンを搭載するケンメリも在る。このケンメリは過去にボディを含むレストアが施されており、現状でも十分に美しいボディラインと塗装を保持。かつGT-R仕様とされたパーツにも不足はなく、逆をいえば今からボディをレストアしつつ、これだけR用パーツを用いて作り直すとは多大な金額がかかってしまうことだろう。



### SHOP INFORMATION ロッキーオート

愛知県岡崎市明大寺町字大塚55-31  
TEL0564-58-7080  
<http://www.rockyauto.co.jp/>

このケンメリは598万円で販売するというロッキーオート。RBエンジンのスワップばかりが話題になるが、RBを手がける前はL型チューンをこなしてきただけにノウハウも豊富だ。



ロッキーオートといえばRBエンジン、というくらいイメージが定着してしまいましたが、RBエンジンを手がける以前は、やはりL型エンジンでのチューニングに力を注いでいた。だからL型にも十分なノウハウを持っており、今回紹介するようなL28型を3.1ℓにボアアップしたエンジンを搭載するケンメリも在る。

このケンメリは過去にボディを含むレストアが施されており、現状でも十分に美しい

ボディラインと塗装を保持。かつGT-R仕様とされたパーツにも不足はなく、逆をいえば今からボディをレストアしつつ、これだけR用パーツを用いて作り直すとは多大な金額がかかってしまうことだろう。

それは室内にも同様のことがいえ、すでにダットサンコンペハンドル、シートが組み込まれており、買ったその日からGT-R仕様のL3.1を楽しむことができるのだ。

肝心のエンジンだが、L型3.1ℓと聞くと高回転でのハイパワーと裏腹に、扱いにくい特性なのでは？ とか重いクラッチで四苦八苦するのは？ などとよからぬ想像をしますが、さにあらず。非常に乗りやすくセッティングされている。これは撮

影現場までロッキーオートから運転してみたいの快感で、アイドルからのクラッチミートを受け付けてくれ、そのままアクセルを踏み込めば例のL型サウンドを伴い心地良く回転が伸びていく。もちろん低回転でガバッと開けてはいけませんが、そういったキャブ車のお約束を守れば、非常に乗りやすく速い。もちろんクラッチは強化ではあるがシングル軽い仕様で、長時間運転していても疲れることはないだろう。

販売価格を聞いてから内容を逆算してしまうのは、この手の仕事をしていると習慣になってしまうこと…。ベースのケンメリからここまで仕上げるとなると、販売価格を上回ってしまうことは確かだろう。

## やっぱりL型チューンが欲しい